

シンポジスト・プロフィール

中原凱文氏

(なかはら・よしぶみ)

昭和16年生

東京工業大学工学部保健体育群 教授

専攻 運動生理学 高齢者の体力、運動時の心機能など

橋爪大三郎氏

(はしづめ・だいさぶろう)

昭和23年

東京工業大学工学部人文社会群 助教授

著書に『現代思想はいま何を考えればよいか』などがある。

石川 晋氏

(いしかわ・すすむ)

昭和18年生

文部省大臣官房審議官(体育局担当)

澤田 亨氏

(さわだ・すすむ)

昭和35年生

東京ガス(株)人事部 健康づくりチーム係長

明河正一氏

(あけがわ・しょういち)

昭和21年生

ソニー(株) 本社健康開発センター事務長

梅垣洋一郎氏

(うめがき・よういちろう)

大正11年生

信州大学医学部教授、癌研附属病院放射線科部長

日本学術会議会員などを歴任



コーディネーター・理学部教授  
東京工業大学保健管理センター所長 永田 一清氏



文部省・大臣官房審議官(体育担当)  
石川 晋氏



東京工業大学 工学部 教授  
中原 凱文氏



会場風景



東京工業大学 工学部 助教授  
橋爪 大三郎氏



東京ガス・健康づくりチーム係長  
沢田 亨氏



ソニー・健康開発センター事務長  
明河 正一氏



梅垣 洋一郎氏

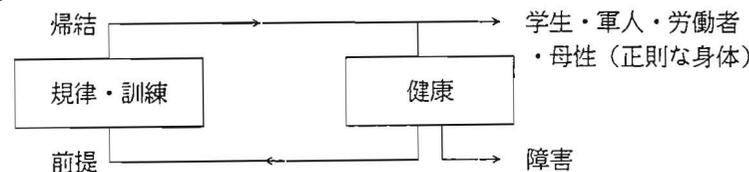
□0□ 講師紹介 (はしづめ だいさぶろう) 東京工業大学工学部助教授 (社会学)。1948年生まれ。『はじめての構造主義』(講談社現代新書)、『大学は変わります』(共著・青弓社)、『橋爪大三郎コレクションI~III』(勁草書房)など。

□1□ 健康とは何か?

\* Def. 身体の良い状態(積極的?定義) この意味での健康は「普遍的な状態」。  
病気でない状態(消極的定義) 身体とともに健康もある。

\* 近代的概念としての「健康」~測定・記述の方法と相関的  
物理学→ 時間、位置、速さ、強度、…… ⇒身体検査、運動能力  
医学(顕微鏡)→ 病原菌、伝染、…… ⇒消毒、衛生、  
統計学→ 分布、平均、分散、…… ⇒正常/異常、得点、

\* 健康の社会的機能



M. Foucault (フランスの思想家・歴史学者) 『監視と刑罰』  
犯罪者の監視装置(監獄)の誕生が、近代の主体(正則な身体)の形成に決定的イギリスではこれに先立つ時期、怠惰が取締られ、勤労が美德(義務)とされた。

□2□ ポスト近代と、健康の変容

\* ポスト近代……近代の「深化」 身体機能の、社会的意味が変化していく  
単純労働(マルクスの予想) 知的労働  
第二次産業 ⇒ 第三次産業(知識集約化産業)

\* 健康の消費  
消費社会~生産(設備)過剰社会~健康チャンス過剰社会(学校の独占が崩れる)  
運動部からサークルへ 強制→任意 目標→楽しみ  
プレスティッジ(示現)としての健康 会員制フィットネス・クラブ  
健康であることと、社会的に有用な労働力であることとの関係が絶ち切られた。

\* “知的生産を支援する健康”とは何か  
軍隊……人的消耗を前提 青年~壮年男子の、運動能力をもっぱら問題にする(筋力・運動機能)  
↓  
知的生産 生涯にわたる全人的な活動  
↑ : 耐久性器官(心臓・肝臓・腎臓・肺・胃腸など)の活力に依存  
活動的な頭脳 ← 運動は健康に有害でありうる!  
刺戟的環境

□3□ 21世紀の大学と、健康開発

\* 運動系 規律訓練型一斉授業 ⇒ サークルまたは個人のスポーツランド  
\* 内蔵系 ⇒ 禁煙・禁酒・食餌(薬膳)、総合生活管理  
\* 環境 物的環境: 学内美化 ⇒ フレキシブル・ワーク・プレイスの追究  
人的環境 精神衛生 ⇒ 大学の組織を、開かれたものにする

人びとを一様に規律訓練する必要からうまれた近代の健康観は、産業社会の深化にもなって変容し、古典的な定義からますます逸脱しつつある。大学においても企業においても、生涯にわたる知的生活を支えることのできる、内臓型の健康開発が緊急の課題となっている。

1. 健康とは何か

健康とは何か? この古くて新しい問いに、もういちど向き合うことは、健康の過去と現在を考えてみるのに、ちょうどよい出発点となるだろう。

いざ「健康」を定義しようとすると、そんなに簡単でないことに気づく。とりあえずそれは、「病気でない状態」には違いない。しかし、この消極的な定義(健康がなにでないか、をのべる定義)は、議論を少しも先へ進めない。というのは、それでは「病気」とは何ですかと改めて問われると、それは「健康でない状態」です、と答えるしかないからである。

そこで、もう少し積極的に定義してみると、健康とは「身体の良い状態」だ、と言えるだろう。もちろん、なにが「良好な状態」かは厳密に語りにくいのだが、それでもおおまかになら、身体の具合が「良好」かどうかについて、自分でも感じる事ができるし、他人の状態を外から観察して知ることもできる。

このような意味での「健康」の観念は、どんな社会にもある、と思われる。もちろん、時代や文化の違いによって、「健康」とされる範囲は少しずつずれているだろう。たとえば、われわれの社会なら精神病と診断されるケースでも、別な社会なら「神の使い」で通ったりするかもしれない。しかし、元気よくふつうに生活できるという意味での「健康」の観念は、人類に普遍的なものだと言ってよい。

ところで、われわれの知っている「健康」は、こういう普遍的なレベルの健康観とちがった、ごく特殊な考え方、すなわち、近代的な健康の概念である。近代的な健康概念の特徴は、健康が「測定できる」という考え方に立脚していることである。健康を測定し、記述する仕方が発達すると相関的に、近代の健康の概念も発達してきた。

健康を測定・記述する場合の、ひとつの基準を与えたのが、物理学である。物理学（特に、力学）は、位置、質量、時間を測定することから出発して、速度、加速度、力、エネルギーといった、基礎的な概念の系列を組み立てた。身体検査（人体を計測する方法論）は、こうした物理学的な精神の延長線上にある。身長、体重、筋力、各種の運動能力などは、どれもこうした測定と記述の産物なのだ。

もうひとつの源泉は、医学である。特に、顕微鏡の発明は、病原菌を目に見えるようにし、消毒と公衆衛生の観念をうみだした。保菌者を隔離し、伝染を防止し、健康を管理することが、行政の課題となる。こうして、一人ひとりが健康であることが、社会的な「義務」にさえなっていくのである。（医学はもうひとつ、遺伝子を見出した。遺伝子は人間の健康をつかさどる究極の原因物質であり、われわれはいま、健康を遺伝子レベルで考えはじめた時代の入口にいる。遺伝の観念が健康とクロスするところに、優生学がうまれる。しかし、遺伝に関する科学的知識が普及するのは、今世紀に入ってから。近代の健康観がいちおう成立した後のことなので、この話はこれ以上しないでおう。）

第三に、統計学。近代統計学は、農業試験場から生まれたというのが、正規分布、平均、分散、標準偏差、……などといった基本的な概念を準備した。平均からある範囲内でずれた個体を正常とし、それ以外を異常と判定するのは、こうした統計学の考え方を下敷きとしている。統計学は、のちに教育の分野に大々的にとり入れられ、知能検査（IQ）や偏差値として、ひとり歩きするようになる。

さて、これら物理学、医学、統計学の成果を総動員して、健康を測定・記述するのは何のためかと言えば、それは、近代産業社会が大量に必要とする種類の人びと、すなわち、労働者と軍人とをつくり出すためであった。これらの人びとは、労働力、戦闘力として一定の身体の性能をもつ必要があり、その性能が「健康」と理解されたのである。近代の健康の概念、それは、こうした社会的な要請にもとづいて、定着していったのだ。

\*

近代の健康は、測定され記述されるだけではない。それは、管理され、生産されさえるのである。近代の健康とは、「労働者や軍人としての身体の性能」のことなのだから、それは当然である。

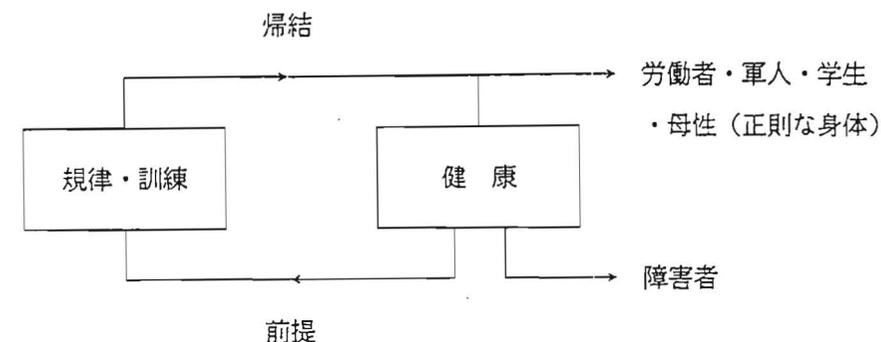
健康をうみだす近代特有の活動を、規律・訓練（ディシプリン）という。

健康と、規律・訓練との関係を考えてみよう。

規律・訓練は、健康を「うみだす」とのべたが、それは文字通り自由に健康を生産するわけではない。身体は、まったく可塑的なわけではないからだ。そこで、規律・訓練によっても健康とならない（すなわち、労働者や軍人としての身体の性能をそなえることのできない）身体が存在することになる。そういった人びとに、規律・訓練を課しても無駄である。そこで、そういった「規格はずれ」の人びとは、はじめから排除されてしまう。健

康は、規律・訓練の帰結であると同時に、その前提でもあるのだ。

互いに前提であり帰結でもある、規律・訓練と健康との関係を図に描けば、つぎのようになる：



規律・訓練とは、大勢の人間を集めて、一定の指揮系統のもと規則正しく行動させ、全体として効果をあげることを目的としたものをいう。それは、学校の体育の時間にはじまり、軍隊や職場の身体訓練に引き継がれていく。その帰結として、所定の能力をもった労働者、軍人、母性、要するに、正則(regular)な身体をもった人びとがうみだされる。このプロセスは反面で、産業社会のフォーマットに合わない人びと、障害者（正則でない身体）を排除するプロセスでもある。

近代に特有な規律・訓練のあり方に注目したのは、フランスの著名な思想家・歴史学者ミシェル・フーコーだった。彼は、『監視と刑罰』（邦訳題名＝監獄の誕生）のなかで、J. ベンサムの考案した犯罪者の監視装置（パノプティコン＝一望監視装置）が、近代的な主体（正則な身体）の形成に決定的な役割を果たしたとのべている。自分の行動に責任を持ち、自分の行動を組織化していく。時間を守る。約束を守る。嘘をつかない。無駄づかいをしない。こうした、産業社会にとって当たり前の行動様式は、実は歴史的に形成されたものであり、規律・訓練を通して人びとが身につけたものである。こうした事実を、フーコーの著作は思い起こさせてくれる。

カトリック国であるフランスで、規律・訓練と告白（告悔）の制度とが主体の形成を推し進めたとすれば、新教国のドイツやイギリスでは、禁欲的プロテスタンティズムがその役割を担った。著名な社会学者、マックス・ウェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で、カルヴァン派の新教徒が世俗内的な禁欲を一般化させ、近代市民社会の行動様式を準備した点を指摘した。実際、イングランドでは産業化の初期、農村を追われた人びとが都市に集まってきた頃、怠惰であることや浮浪が刑法をもって罰せられ、見せしめのため街中で手ぐさりに繋がれたともいう。勤労が美德とされ、義務とされたのは、それほど古いことではない。

余談となるが、明治の新政府が農民に新兵訓練を始めたとき、みな「気をつけ」や「行

進」ができずに困ったという。学校でカタカナを平仮名より先に教えることにしたのも、平仮名の丸い字が直線的なカタカナに比べて書きにくく、学習が困難だったからだ。今日われわれが当然のこととしている運動能力のかなりの部分は、規律・訓練の産物と考えるべきなのである。

## 2. ポスト近代と、健康の変容

近代は、産業化の時代である。産業化の進展は、労働者、軍人、……といった新しいカテゴリーの人間を大量に生み出した。近代的な健康の概念は、こうした人びとが一つの集団として、その社会的な期待に応え、必要な身体機能を発揮することを保証するものである。

時は移り、いま、ポスト近代と言われる時代にさしかかりつつある。

ポスト近代は、文字通りにとるなら“近代のあと”、すなわち、“近代が終わったあとのもうひとつの時代”という意味である。しかし、その内実はそうではあるまい。ポスト近代とはむしろ、近代がいつそう「深化」した時代、近代の新しい局面と理解すべきだ。近代がもともと持っていた可能性が、いま現れてきているのである。

\*

ポスト近代が、健康のあり方を変容させるとすれば、それはどうしてか？ それは、身体機能の社会的意味が変化していくからである。

ポスト近代社会のあり方を理解するには、まずそれを、古典的な近代社会と比較してみるのがよいだろう。たとえば、『資本論』を書いたマルクスをとりあげてみる。彼は近代社会をどうとらえようか？

マルクスによれば、近代社会（あるいは、資本主義社会と言っても同じ）は、資本主義的な生産様式が支配的となる社会だった。産業化の進展とともに、伝統的な社会階層（職人や小農民や、自営業者や地主層）は解体し、生産手段を所有する資本家と、労働力以外に売ってのいない労働者へと二極分解していく。これがマルクスの描いた近代社会像だった。こうして大量に出現する労働者は、いわゆる単純労働者で、互いに置き換え可能な存在であり、特別な知識や技能を持たない。事実、産業化の進行とともに、第一次産業の人口が急減し、代わって第二次産業の人口が急増したのであった。

しかし、二〇世紀も後半に入ってから、近代社会はマルクスの描いたのと違った様相を見せ始める。第二次産業人口はむしろ減少に転じ、第三次産業がそれを上回るようになる。労働者の高学歴化、専門化が進み、いわゆる単純労働者はしだいにその役割を減じていく。この変化は、知識集約化産業と言われたり、重厚長大から軽薄短小へと言われたり

した。要するに、産業が知的労働を主軸とするようになり、労働のあり方が従来と根本的に変化したのである。

労働のあり方が変化すれば、健康の概念も、それにつれて変化せざるをえない。

近代的な健康の概念は、やはりその根本のところ、単純労働者（工場で言えば未熟練工、軍隊で言えば歩兵）の身体機能を念頭においていた。それが社会の標準的な活動形態であり、それを基準にすれば、それ以外の社会的活動をあらかじめカヴァーすることができた。けれども、知的労働者は、体力や筋力に依存して仕事をするわけではない。またその労働形態は多様であって、十把ひとからげに論じることはできない。どのような点で良好な身体機能が、知的労働を支えるのかも、多様でありうることになる。こうして、ポスト産業社会の健康のあり方は、単一のものから多様なものに変容していく。

\*

こうした健康観の変容にともなう現象のひとつは、健康が、労働のために必要な前提であることを離れて、それ自身、消費される対象となったことである。健康であることそれ自体がステータスとなり、消費の対象となった。健康となりうる機会を商品（サービス）として提供することが、当たり前のことになった。

知的労働が主流となったポスト近代社会は、80年代に、まず消費社会としてその姿を現した。

消費社会とは何か。ひとくちで言えば、それは生産過剰の社会。生産設備が需要に比べて過剰で、商品を生産するよりも販売するほうが、ずっと困難である社会をいう。同じことを消費者の側からみれば、商品を購入する動機が、商品そのものよりも、そのデザインとか、類似商品との微細な差異とかいった、商品の付随的な性質に移っているということである。バルトの記号論やボードリヤールの消費社会論が、消費社会を読み解く標準的な議論とされ、類似の言説が大量に生み出された。

消費社会の到来は、健康をめぐる社会状況にも大きな変化を与えた。

消費社会は、健康になるためのとチャンスが過剰である社会、であるとも言える。

体操や運動競技などの近代スポーツ、あるいは軍事教練というかたちで、わが国に本格的な規律・訓練が導入された当時、そうした訓練の機会は限られていた。学校か兵営（さもなければ、工場付属の運動施設）のなかでなければ、人びとは体操をしたり、走ったり跳んだり、集団で行動したりすることはなかった。農村も家庭も、そうした身体訓練を必要としなかった。規律・訓練の場所にやってきてはじめて、人びとはどこの誰であるという具体性を失い、ひとつの（他者と置き換え可能な）身体となって、純粋にその機能だけを問題とされるのであった。

高度成長をへて福祉社会、消費社会と進むうちに、運動場、プール、体育館、スポーツ・センター、フィットネス・クラブ、レクリエーション施設はありふれたものとなった。

スキー、ダイビング、ジョギング、テニス、ダンス、サッカー、バレーボールなどさまざまなスポーツを愛好する人びとが増え、公共施設や商業施設で自由にそれを楽しむようになった。いまや、こうした「健康チャンス」はむしろ過剰である。かつてのように、学校がスポーツにふれるチャンスを独占していた時代は、過去のものとなったのである。

こうした変化を背景に、大学のキャンパスでもしばらく前から、新しい傾向がうまれている。運動部が敬遠され、かわってサークルが人気を集めている、という変化がそれである。

運動部は体育会系ののりで、勝負を目標とし、集団への献身と犠牲を強い、先輩・後輩の序列を重んじ、旧軍隊ともどこかで通底するような規律・訓練の伝統を残してきた。ここでは強制がつきまとい、身体機能の訓練は、目標達成（勝負）のための手段と位置づけられている。サークルは、スポーツをやりたい人間がスポーツを楽しむための任意団体であり、強制の要素はない。そして身体機能の訓練は、手段ではなくて、最終的な目標である。楽しいから、身体を動かすことが爽快だからスポーツをするのであって、その逆ではない。スポーツは、集団的な規律・訓練の手段から、個人の私的な快樂のためのものに、その性質を変化させている。

ヨーロッパでは、クラブ・スポーツが本流で、学校のスポーツは副次的なものだった。それが日本では、長いあいだ逆転していた。生活にゆとりが生まれ、個人的に汗を流すライフ・スタイルが生まれるとともに、それがアッパー・ミドルクラスに属することの、プレスティッジ（地位の顕示）という意味を帯びはじめる。“健康のために何かをやっている”という満足感は、身体を動かすことの爽快感よりも、ある恵まれた階層に属しているという自己満足に由来するようになる。会員制フィットネス・クラブの林立は、消費社会の差別化の論理が健康にまで及んだことを明らかに示している。

このように、健康であることと、社会的に有用な労働力であることの証明とは、関係がすでに断ち切られたのだ。たしかに、肥満していないことや煙草を吸わないことが、エグゼクティブの地位に相応しい自己コントロール能力を示すものと、受け取られたりするということはある。しかし、ポスト近代社会の労働にとって、筋力や持久力やそのほかの運動能力は、今後ますます意味のないものになっていくだろう。近代の出発点において、健康であることは、社会的に有用な労働力であることの標識だった。そうした健康の概念は今日、すでに解体してしまったと言ってよい。

\*

だがむしろ、ここで健康の概念を定義し直すべきなのである。

ポスト近代社会の標準的な労働、それは知的労働だ。それでは、知的労働に必要な身体的条件とは何か？ それこそ、ポスト近代の健康の概念にはかならない。

ポスト近代の健康を考えるため、まず、知的労働（あるいは、より広く、知的生産）と

は何かを考えよう。

知的生産がどのような性質をもつ人間の活動か、まだ議論が少ない。比較のため、かつての規律・訓練型の行動様式の典型——軍隊との比較を試みる。

軍隊は、人的消耗を前提にしている。（人的消耗とは要するに、戦死や戦傷であり、皮肉なことに、健康の反対物なのである。）軍隊を構成する兵士（正則な身体）は、青年～壮年の男子からなる。彼らは一様に、戦闘目的に献身するものと考えられており、もっぱら彼らの運動能力（筋力・運動機能）が問題となっている。身体機能が衰えてしまえば、兵士として適格でなくなってしまうのだ。そして、工場の物的生産労働（特に、機械制工場的大量生産労働）も、こうした軍隊をモデルにしたものなのである。

それに対して、知的生産は、個々人の知的能力に依存した活動であって、そもそも規律・訓練になじみにくい。知的生産は、（運動能力という意味での）身体機能ではなしに、精神機能にもとづいている。それは、①青年～壮年にかけての一時期ではなく生涯にわたる、②男女の区別のない、③全人的な活動なのだ。

知的生産がどのようなプロセスなのか、ここでは深く追究しない。ただそれが、いきいきと活動的な頭脳の所産であることだけは、あきらかだ。そして、頭脳が活動的で生産的であるためには、(1)（頭脳に外から働きかける）刺戟的な環境、(2)（頭脳を内側から支える）良好な身体条件、の二つが必要だ。特に後者に関しては、知的生産が生涯にわたる活動であるという点にかんがみるならば、耐久性の器官（内臓器）が重要であることを強調しておくべきだろう。

知的活動を支える身体機能は、骨格・筋肉にもとづく運動能力ではなくて、内臓の働きである。内臓には、心臓・肝臓・腎臓・肺・胃腸・免疫系などがある。（心臓や肺を別として）これらの多くは、“鍛える”ことが不可能なものばかりだ。それどころか、運動がかえって有害となるケースも考えられる。少なくとも、こうした器官の活力が、従来のような規律・訓練によって強化されることはない、とは言えるだろう。

結論を繰り返せば、ポスト近代において、健康の意味するところは、骨格・筋肉を典型とする運動性の身体機能から、内臓を典型とする耐久性の身体機能に変容していく。それは、社会の標準的な労働が知的生産に移行すると並行した、必然的なプロセスなのである。

### 3. 21世紀の大学と、健康開発

大学は、知的生産のための中核的な機関として、ポスト近代のひとつの拠点となるであろう。その大学で、知的生産を支援することを目的として、健康の問題そのほかをどのよ

うに考えていくべきなのだろうか？

知的生産を支援するうえで、考えなければならない要素は、三つある。第一に、運動能力としての身体機能に関する方面。これは、従来の健康の概念に近い。第二に、内臓系に代表される生命力としての身体機能に関する方面。これが、これから本格的に到来すべきポスト近代社会の健康の概念に相当する。第三に、知的生産にふさわしい環境を整備すること。これはさらに、物的環境と人的環境とに区分できる。これらは、心身の健康を保つうえで、重要な要素である。そのあり方についても考察を加えておきたい。

\*

現在、主に大学の一、二年で実施されている体育の実技は、規律・訓練型の一斉授業である。こういう授業が大学にあることの必然性（特に、必修単位である必要性）が、議論されたろうか？ そういった議論の裏づけもなく、ただ惰性で続いているだけではないのか。

イギリスに、理論物理学者として世界的に著名なホーキング博士という人がいる。彼は筋肉が動かなくなる病気で、ずっと車椅子の生活を続けている。だが、学者としての活動は旺盛そのもので、数多くの重要論文を発表し、各国で講演、テレビにも出演するなど、学界で指導的な役割を果たしている。彼がかりに大学一年生であったとしたら、体育実技には参加できないし、単位も得られないだろう。でもそんなことは、彼の知的生産性になんかの関係もない。車椅子の生活であっても、物理学者としての活動を続ける身体機能（生命力）さえあれば、それで十分なのである。ホーキング博士は、その意味で「健康」だと言うべきだ。

もちろん車椅子で暮らす人びとも、それなりの運動をしたほうがよい。誰にどういう運動が必要かは、一人ひとりの問題だ。大学に必要なのは、学生をひとつの群れと考え、彼らの運動能力の平均をのぼそうとしたりすることではない。（昔、東大の教養学部でトレーニング・クラスを設け、運動能力の劣る学生たちに筋力・運動能力強化を義務づけたことがあったが、それが彼らにとってどういう意味があるのか、はっきりした説明はなかった。）そんなことよりも、必要なのは、各人の素質にあわせた運動の方法を、個別にアドバイスしていくことである。規律・訓練型の一斉授業は、そのためのなんの役にも立たないのである。

運動やスポーツで汗を流したければ、授業でなくても、大学には運動部やサークルもある。学外のスポーツ・クラブやレジャーもある。そうした運動のチャンスをもっている学生に、体育実技を義務づけるのは時間の無駄だ。いっばう、そうしたチャンスに恵まれない学生に、ひとつの選択肢として、体育実技を用意するというのは意味のある配慮かもしれない。

そこで、こう結論できよう。(1)体育実技の必修は廃止し、学部の任意選択科目のひとつ

とする。（大学院でも、サーヴィス科目として設けておいたほうがよい。）(2)運動系のサークルの活動を、体育実技の単位に振り替えることができるようにする。（そのほかの個人的活動も、なるべく同様に考える。）(3)体育実技も、一斉授業形式をやめ、自由に利用できる運動施設の利用記録などによって、単位を認定できるようにする。（こうしたやり方のほうが、卒業後・将来にわたって継続できるライフ・スタイルを、育てることができる。）

大学の（特に理工系の）学生は忙しい。キャンパスの内部に運動のチャンスがあれば、時間を有効に利用できる。立地の点で学内施設に競争力があることは明らかである。民間に委託して、学内で営業してもらおうという方法も考えられる。

\*

主として机に向かう仕事である知的活動にとって、運動機能は大して重要でない。より重要なのは、生涯にわたって「身体の良い状態」を保つことができる、内臓系の身体機能である。心臓、肝臓、腎臓、免疫系といった身体機構のはたらきが、身体の耐久性を保証してくれる。

こうした内臓系の身体機能は、（少なくとも規律・訓練型の方法では）強化することができない。それどころか、こうした方面の身体機能の重要性が、そもそもまったく意識されてこなかった。

軍隊を考えてみよう。運動機能を高めて、徹夜の行軍をしたり、補給が十分でないのに三日も四日も戦闘を続ける訓練をしたりする。あるいは、そういう実戦を経験する。これは、規律・訓練の成果だ。しかし同時に、そうした運動機能の強化は、内臓系に大きな負担をかけずにはおかない。その結果、身体に不調をきたしたり、寿命を縮めたりするとしても、それは兵士が軍隊を除隊したあとであり、軍隊にとっては問題にならない。内臓系のはたらきは、古典的な健康の概念にとって、測定にかからず、考慮しなくてもよいものだったのである。

大学でも、こうした面での健康増進について、まったくと言ってよいほど取り組まれてこなかった。しかし、知的生産を支援するためには、こうした方面こそがまさに大事なのだ。とりあえず手をつけるべきなのは、内臓系の身体機能を（増進できないまでも）せめて弱めないにはどうすればよいか、学生に教えることである。具体的には、

- (1)禁煙……肺、肝臓、頭脳に障害を生じることが明白である。喫煙をやめるよう、強く指導する。
- (2)禁酒……一気飲みのような暴飲は、肝臓、頭脳に障害を生ずる。煙草と違って少量であれば薬効も期待できるが、原則としてやめるよう、指導する。
- (3)食事……中国には「薬膳」の考えかたがあり、漢方薬と食事は連続・一体のものと考えられている。従来の栄養分析表にとらわれず、減塩、低脂肪、繊維質、高

ビタミン、良質蛋白、適正カロリーの食事を、食材の調達→調理→食卓構成にいたるまで、系統的に指導すべきである。

(4)総合生活管理……睡眠時間、運動量、食事、衛生そのほかの健康面に関する、総合的な生活管理の方法と技術を、体系的に習得させるべきである。

(5)運動法……前項とも関連するが、ヨガ、太極拳、気功など、内臓系賦活・生命力賦活型の運動を、生涯を通じて実践できるよう、その基礎を教えるべきである。などが考えられる。

食事について、もう少しのべよう。

食習慣は、各民族、各文化によってまちまちだ。国際化が進めば、ひとつのキャンパスに食習慣の異なる人びとが混在することになる。日本の大学は、この点の配慮がまったくない。豚肉を食べないなど、厳しい戒律をもつイスラム教徒。同じく、特定の食品しか口にできないユダヤ教徒。最近欧米を中心に増えているベジタリアン。そうした人びとの食習慣を尊重できなければ、大学の国際化はありえない。こうした方面からも、あまりにお寒い現状を一刻も早く改善する必要がある。

\*

第三に、知的生産を支援する環境の整備を考えなければならない。

環境のうち、まず物的環境からのべてみよう。

物的環境について現在言われているのは、学内美化である。学内美化とは、ゴミを出さず、醜いもの、きたないものを少なくするという意味であろう。まことに消極的なスローガンと言わざるをえない。より積極的に、知的生産を刺戟する環境にはどのようなものがあるか。たとえば、内田洋行という会社は、「フレキシブル・ワークプレイス」という概念を立て、一般企業のオフィスを対象に、ジョブ・アナリシス（職務分析）から始まって、オフィス空間の配置、OAシステムの設計、ファイリングや事務処理システム、内装外装にいたるまで、総合的な開発を行なっている。大学や研究所のような知的生産拠点も、こうしたアイデアにもっと関心をもつべきであろう。学内電話のシステムや電子メール、会議の仕方、成績評価や各種の事務処理、会計、研究費の管理、図書、研究指導などを、トータルに設計できる態勢づくりが必要だ。

こうした物的環境は、目に見えるので誰でも気がつくが、もうひとつ、目に見えない環境——人的環境——も、重要だ。

よく考えてみれば、大学とは、知識を求め人びとの知的な交流の機会、すなわち、知的なネットワークの場である。教育も研究も、日常的な人と人との触れあいがなければ成り立たない。こうした人的環境が良好に保たれていることは、知的生産にとってもっとも基本的な条件である。

従来、こうした方面の問題は、学生の精神衛生としてとらえられてきた。ノイローゼや、

精神異常など、問題を抱えた学生を見つけ出して、カウンセリングしたり医療機関を斡旋したりする。それが精神衛生のなかみだった。これは、問題が起こってから個人単位で対策を構じるもので、あまりにも消極的だった。もっと積極的に、良好な人的環境（人間関係）を生み出していくことを考えるべきである。

それでは、どのような人的環境が、知的生産を促進するのだろうか。

これには、大学の制度問題がからむので、ひとくちで答えるのはむずかしいが、要約するなら、大学の組織を開かれたものにする、これにつきるだろう。

人間関係がうっとおしい。教授とうまくいかない。これでは就職もむずかしいなあ。そんなことをくよくよ考えていたのでは、研究に集中できないし、身体も悪くなるに決まっている。大学の風通しをよくしよう。ほんとうは大学の健康管理は、こういった点が一番大事なのだ。

たとえば、常温超伝導が成功しそうだというニュースが飛びこんでくる。そうなれば、みな研究室に泊り込みで、不眠不休で実験に取り組むだろう。運動不足で睡眠不足、体力も消耗してフラフラになるかもしれない。しかし、本人が臨んで研究をし、しかも知的世界の先端に立っているという興奮があれば、そういう困難はなんでもないはずだ。こういう場合、人間は病気にならない。身体的な条件がよくなくても、彼は健康なのである。

それに対して、研究室がタコ壺化し、人間関係がもつれているほうがずっと悪い。研究がうまくいかなかったり、仕事が評価されないということは、あるだろう。問題は、それが人間関係とからんでしまうことなのだ。大学が開かれているということは、人事や成績評価が、公平で公開されていて、ここがダメならよそがあると、移動の自由が確保されていることである。教員の場合、これまでの経歴や人脈があるから、まったく追い詰められることは少ないが、まだ社会に出ていない学生（大学院生）の場合、問題が深刻になりがちだ。就職や転科の際に指導教官に依存しないでもすむよう、単位の互換性、奨学金の充実、ポストの公募制など、できるだけ手を打っておく必要がある。

東工大の場合、純潔率（東工大のポストを東工大の出身者が占める割合）が比較的に高く、外国人の採用もきわめて少ない。東工大が世界に名をなすためには、思い切った大学自由化に踏み切る必要がある。そうした大学の制度改革がおそらく、知的生産に刺戟的な人的環境をつくり出すだろう。

\*

さて、以上、ポスト近代における健康の概念の変容を考察し、大学の健康開発のあるべき姿を考えてみた。もちろんこれは、健康問題の専門家でない社会学者の、ほんの試案にすぎない。より専門の方々に、これを批判をいただき、あるいはこれにいつその肉づけをいただければ幸いである。

\* "Post-Modern Society and the Changing Health", by Daisaburo Hashizume